

伝統の絹文化継承を

岡谷で「日本人の色と糸」講演

伝統ある日本の絹文化の継承と未来への発信を目指す「日本絹文化フォーラム2024」が15日から、岡谷市のカノラホールなどで2日間の日程で始まった。今年迎える岡谷蚕糸博物館(同市)の開館60周年・リニューアルオープン10周年記念事業の第1弾として、「日本の色を引き出す糸の力」をテーマに開催。

初日は専門家の基調講演、染織家によるパネルディスカッションを繰り広げ、県内外の約150人が聴講した。製糸業で隆盛を極めた岡谷市、同博物館、NPO法人シルク文化協会などでつくる実行委員会が主催。基調講演では、きものジャーナリストの中谷比佐子さん(東京)が「日本人の色と糸」と題し、美しい色彩を引き出す絹系について話した。

ステージには日本茜、紫根など日本古来の植物で染めた着物を展示。塩漬けた繭糸を使った生地もあり、「光沢や染め色の吸収に優れる」と中谷さん。先人が築いた素晴らしい技法を残していきたいと伝えた。

講演に続いて、染色作家の

高橋孝之さん(東京)、京鹿の子絞りの寺田豊さん(京都)府、西陣織の伝統技法「爪搦本綴織」の服部秀司さん

同氏が活動事例をそれぞれ発表。パネルディスカッションもあった。

フォーラムは今年6回目。



日本古来の植物で染めたシルクの着物を背に、中谷さんが講演した日本絹文化フォーラム

開会のあいさつで原田尹文実行委員長は「シルク文化を絶やしてはならない。関係者の皆さんの力を借りてつなげていきたい」と述べた。

16日は諏訪地方の近代化産業遺産を中

心に、同館や旧山一林組製糸事務所、片倉館などを巡る見学会を開く。

岡谷蚕糸博物館は1964

年10月に同市本町に開館し、2014年8月に同市郷田でリニューアルオープンした。

(小山真由美)